

編集後記

新年を迎え、またたくまに日が過ぎ去り、早1月のカレンダーも余すところ少なくなりました。読者の諸兄酷寒の候いかがお過ごしですか。

さて今月号の特集“脳卒中の早期治療”はより積極的に治療に取り組む我々PT, OTにとって、一步でも可能限界を広げ押し進める上からも必須のものと考え企画しました。まず内科学の立場から山口武典先生・他(国立循環器病センター)に、そのリスク管理面について簡明に、外科学面からは、植村研一先生(浜松医科大学)に、その外科的対策を脳卒中の発生から、手術適応、手術時期、手術療法にわたり平易に解説して戴きました。また“脳卒中発症後の看護”を伊原晴美氏・他(関東通信病院)に、理学療法面では、早期治療プログラムについて深沢弘氏(かしま病院)に、作業療法面では、早期のアプローチについて比留間ちづ子氏・他(東京女子医科大学病院)にそれぞれ筆を執って戴きました。人間が人間たるゆえんは「脳」にあることは、進化論を論ずるまでも無いことですが、他の疾

患が医学の進歩によって征服されても「脳卒中」との戦いは終わることがなく、いつまでも我々のメインテーマであり続けることにちがひありません。

また、本号から講座「リハビリテーションと力動精神医学」も始まりました。他に続編の講座「歩行」、研究と報告が2編、いつも楽しいアイデアのプラクティカル・メモ2編、色ページでは、プロGRESS、アンテナ、インタビュー欄が紙面を埋めました。

近年世の移り変わりは早くなっているようですが、人間の根本的な部分はむかしのそれと大差が無いように思えます。リハビリテーションも人間臭い分野が多いだけにテンボが遅いようで、ある新聞の一隅に「リハビリテーション」の文字を見出し友と話題にしてから十数年経った今、この言葉がようやく市民権を得たように見受けられますが、やはり時代の波とは別のところを悠然と歩いているのでしょうか。

(大喜多 潤)

* * *

理学療法と作業療法 (第20巻 第2号)

1986年2月15日発行(毎月1回15日発行)

1部定価 1,250円(配送料60円)
(年ぎめ予約購読料 15,350円)
(ただし、特別増大号を含む)
(送料弊社負担)

発行 株式会社 医学書院
代表者 椿 孝雄

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 受付台 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5703

(担当: 西塚・細田)

販売部直通 (03) 817-5659・5660

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 (株)学術図書印刷 電話(03)814-4961

広告申込所 (株)医薬広告 電話(03)814-1971

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 1986,

Printed in Japan

本誌の内容を無断で複製・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
東京都衛生局顧問

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
国立身体障害者リハビリ
センター病院長

(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
ペインリハビリテーシ
ョンクリニック高島平
整形外科

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
東京都立衛生短大設立
準備室

富 岡 詔 子
信州大学医療技術短大

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

池 松 洋 子

伊 東 元

岩 崎 テル子

宇都宮 初 夫

金 子 誠 喜

鎌 倉 矩 子

木 村 信 子

菊 地 延 子

小 嶋 裕

斎 藤 みち子

鈴 木 明 子

高 橋 正 明

田 口 順 子

橋 元 隆

古 川 宏

松 沢 博

宮 崎 和 子

宮 前 珠 子

山 田 貞 雄

矢 谷 令 子